あごら
さっぽろ

NO.29号

あごら札幌れんらく先：高橋芳恵
Tel. 011-563-6917
NO.29号通信担当者：山口里子

1981.5.28

5月例会は、いつもの例会場「のあ」が都合悪く、その裏手にある「ふらんす市場」で15名の参加で行われました。テーマは、7月の講演会に向けての準備の一つとして、フェミニスト・セラピィの学習。

河野貴代美さんが昨年2月に東京で開設したフェミニストセラピィ「なかま」の、新聞・雑誌での紹介記事(7種)のコピーを中心に、先日、司会の山口が、河野さんを訪問して伺ってきたことも折りまぜて、話しを進めました。

*フェミニストセラピィとは……女性解放の思想に立った、女による女のための心理療法。これまでの心理療法の基礎になっている新フロイト派などの女性の見方(劣等性・受身性)に対して、本来的女性観は、これまでの歴史的文化的規制をはずしたところで、もっと解放された生き方を女性ができる社会を造っていく中で新たに確立されていくべきではないかという立場にたっています。そして、女性が自分に対して自信をもち、もっと自由に自立的な生き方をしていけるよう、まずそれを妨げている要因を自分で見きわめ、克服していく作業の手助けとしてカウンセリングするのです。

*自己主張訓練(アサーティブネス・トレイニング)とは……現在のように、女性にとって様々な悩み〈不自由・抑圧〉にみちた社会で、女性が意識変革して、自分とも他人とも〈仲よい〉関係を築きながら生きていくために、自己主張の訓練の必要性を彼女は説いています。女らしくないと言われるのがこわくて、非主張的な態度に閉じこもるのではなく、さわやかに前向きに自己主張をしていける女性たちになり合おうというわけです。

*具体的に「なかま」の現実は……セラピィの形式は①インテーク(電話受付→予約)②セラピィとなります。セラピィは、1人1時間3000円。

週に1度以内のセラピィを継続していきます。ただし、現在までの所は、セラピィに対する理解不足などの為、1度だけのセラピィにおわっているのが約半分。セラピストは3人いて、ローテーションを組んでいますが、全員、他の職業で自活し、この仕事はボランティア的にならざるをえない経済状況です。

以上、ごくおおざっぱにご紹介しましたが、あとは講演会をぜひ、ご期待！

参考にお読み下さい

- 「自分を変える本 ―さわやかな女へ―」
  リンダ・ルーム、カレン・コバーン、ジョアン・パールマン共著
  斉藤千代・河野貴代美共訳、BOC出版 ¥1300
- 「母と娘の関係」(my mother myself) 上巻 ¥980 下 ¥920
  ナンシー・フライデー著、依岡子・河野貴代美共訳、講談社

あごら札幌で取扱っています。

運営委員会からご報告

今日本は急速に右傾化を示していますが、東京では「女たちは戦争への道を許さない」集会が'80年12月7日、'81年5月2日と、大満員で行なわれており、沖縄をはじめ各地でも主に、あごらメンバーやごくあたりまえの女たちが担う形で、このような集会が行なわれています。あごら最新号も「女と戦争」と題して、多くの女たちの熱い思いを込めて出され、飛ぶような売れゆき。札幌でもぜひそのような集会をもちたいと、運営委が5月例会で提案しました。しかし「やりたい」気持では一致できるが①今年はムリ②ぜひ大きな会を③ごく小人数の会でもやりたい！等々意見が分かれ、結論が出ず、5月20日フェミニストセラピィ講演準備会(拡大)で継続討論されました。ところがここでも長時間の話しあいでも結論が出せず、「決」も半々に分かれ、再び運営委員会もどしとなりました。これについて運営委では今のところ、継続審議中です。

あなたの意見もお寄せ下さいませんか？ やるかやらないか、やるなら、いつごろ、どんな形で。あなたはどのくらい協力できるか、etc。

れんらく先：吉原ミツ Tel.642-8777

(以上 文責 山口)

6月例会案内

・日時　6月13日(土) PM6:30〜9:00
・場所　ノア　彩4条西2丁目 ☎511-1377
・テーマ　『結婚について－未婚者の視点から』
・司会・レポーター　中山和夫

結婚について…… 最近 女性の結婚年齢が上昇する傾向をみせている。「自立する女性」「結婚しない女」などともすると羊翔んでいる女とみられがちな中で、やはりこの結婚ということは未婚者にとっては大きい問題として常に意識していなければならず、その魅力も常に存在している。人が生きていくうえで避けることができないこの問題に対する性の問題も含め、どう考えどう対処したら良いのか。またその悩みをどう他人が理解したら良いのか男女の立場から考えてみたい。

－中山記－

資料で見る既婚女性の現実 －女、再就職－
（エック会より）

女と労働シリーズ4.

■ 日本の男性の家事時間

日本の夫族の家事時間は予想以上に少ない。いや少ないと云うより、ほとんど無いというのに等しい。総理府統計局が、1976年に実施した「社会生活基本調査」によれば、夫の家事時間は、共働きで、平均6分！共働き以外で平均7分！
妻の家事時間は、共働きで平均3時間29分、共働き以外で平均5時間54分となっている。日本の男性の家事時間は、国際的に見てもきわだって少ない。経済企画庁の「生活時間に関する調査」によれば、フランス、西ドイツ、ソ連などでは、1時間半、アメリカやベルギーでも1時間以上を男性が家事のために費している。
たとえば、食事の後片づけ。日本の男性は「いつもする」と「時々する」を合わせても22%。残りの78%は「ほとんどしない」か「全然しない」。
共働きも、そうでない場合も含めて、男性の約8割が、女性に家事を任せっ放しである。
イギリスやドイツでは「いつもする」「時々する」が87%。「ほとんどしない」「全然しない」が1割強にしかならない。
日本の男性の家事への寄与率は10ヶ国中最底である。

（文責．加藤）

『日米婦人問題セミナー』－働く女性と変りゆく家庭－に参加して

5月27日、アメリカン・センター・ホールに於いて午後6時から、マージョリ・スミスさん（札幌アメリカンセンター館長）川島利子さん（札幌青少年婦人活動協会事務員）が、「働く女性と変りゆく家庭」というテーマで日本の現状と相違などを話されました。
有職婦人クラブ等30名位の参加者（あごら6名、男性2名）でお話しのあと、討論交流会と続き、話しはずみました。
アメリカ社会の働く女達、そして彼女たちをとりまく環境、関係性は、ここ10年位で大きく変化してきたようです。
法律的にも差別が禁止され、就職求人広告にも男女差別（職場の花的表現）が消え、女たちのニーズに雇用者側が変わざるをえなくなってきた。
又、そうした変化は、教育の場にも出てきた。初等教育の中でも男女差別はうすれてきているし、母親と学校の関係も変ってきた。もはや母親が終日家にいるものという前提でなくなり、学校の方が考え方、システム（PTA等）を調整するようになってきた。
又、女性が仕事をしつづけることによって、家族のありかたはどのようになってきているのか。家族が血縁を中心とした経済単位の組みあわせから、より精神的、愛情的な結びつきが、強くなった。家事は相互でする。家庭や職場に近い託児所の増加、血縁によらない友達との助け合い。又、夫婦間により精神的、愛情的な結びつきを重視するということは、逆説的に云うと、そうした結びつきを相方で創れない時は離婚になるケースも年々増加している。しかし離婚はもはや悪ーではない。より良いが幸福になるために離婚することもある。
しかし、一方離婚した家庭を"ブロークンホーム"（こわれた家庭）と呼ぶ差別的な言葉も使われる。
子供の非行との問題で、働く女性、離婚した女性が非難されるが、それはかつての働く女のイメージ（職場や家庭の環境が良くなかった時代の）が、そう云わせるのである。
スミスさんはこうしたお話しの前提として、女は仕事を持つべきかどうかではなく、女は働くべきである。男女は平等である。必らず未来はあると云っていた。
この後、川島さんが日本の現状、まだまだ、女が働くのは、結婚までだったり、求人もはっきり男女差別があったり、家事育児はほとんど女が一手にひきうけていたり、教科書の母親像は相変わらずエプロン姿だけ等々、社会の構造が女は家にいるものという前提のもとに動いていることなどを話された。「働く女と家庭」というテーマは、これからも続くだろうが、内容はより明るい未来にむけて変化し続けると私は信じている。

―加藤記―

■講演会のお知らせ■

《第4回　子供の本のつどい》

- 7月27日　全体集会　28日　分科会
- 講師　西田良子
- 会場　道新ホール
- 主催　子供の本のつどい実行委員会
  （教師、絵本作家、絵本をよむ会、家庭文庫他）

※詳しくは細谷さんまで連絡を TEL823-0738。尚ボランティアで託児をしてくれる人をさがしています。